

広報

# あかいけ

# 8

●特集 上野焼のルーツを探る／日韓交流事業

## 開祖金尊楷と故郷泗川

## 町議会だより

●六月定例議会での内容は、

涼しげな清流に誘われて…上野峡「白糸の滝」

豊臣秀吉が野望に燃え、二度にわたって朝鮮に出兵した文禄・慶長の役。

七年間にも及ぶ無益な戦役は、巨額の軍資金と多くの兵の命を失い、そして、朝鮮半島の人々に塗炭の苦しみをあたえてしまいました。

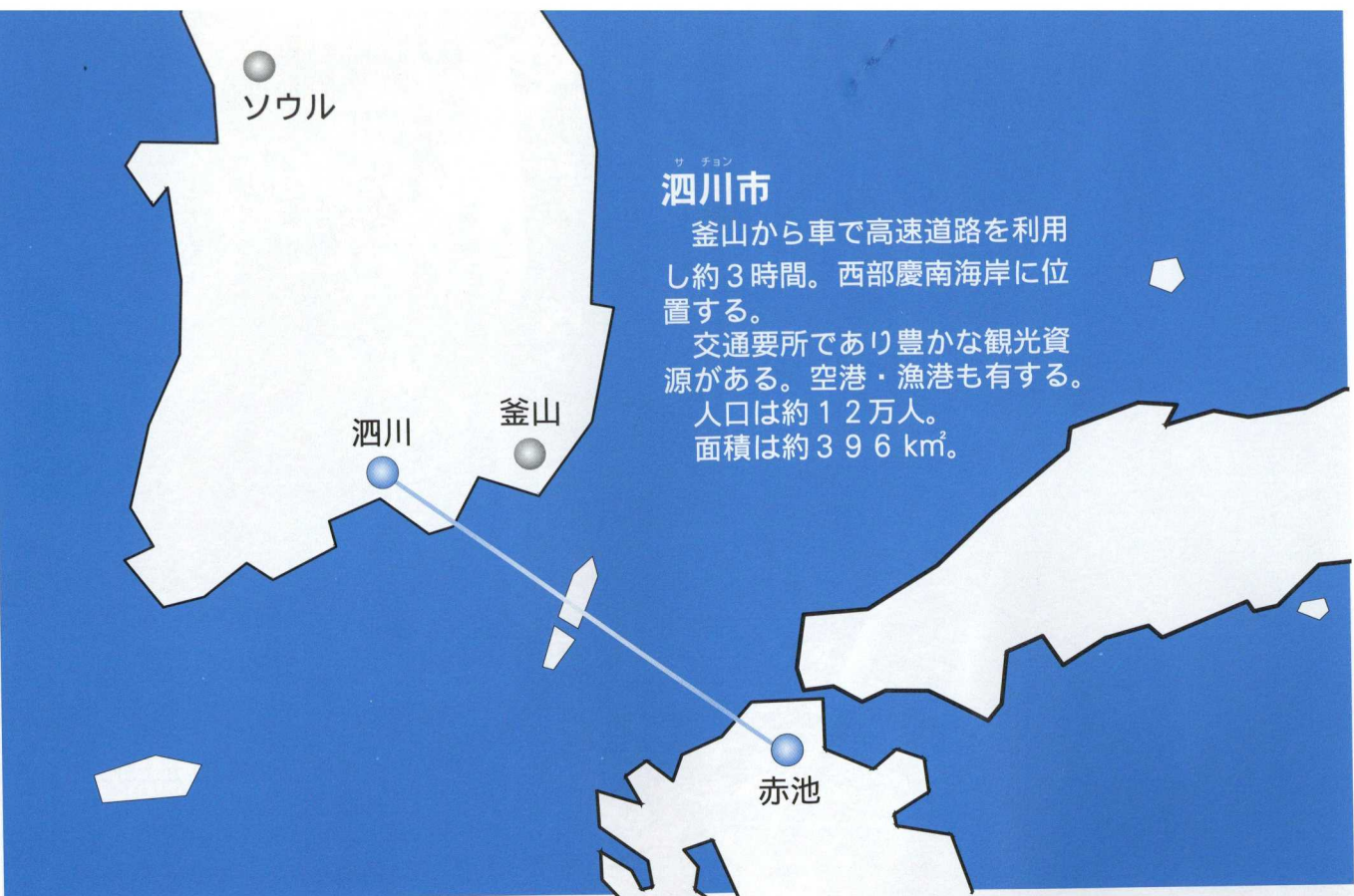
しかし、撤退時に多くの陶工を伴ったことで、当時優秀な技術を持っていた彼らが、西日本・九州各地で窯を起すことになりました。文禄・慶長の役が別名「やきもの戦争」と呼ばれる所以です。唐津焼・萩焼・薩摩焼・高取焼。そして上野焼がその代表とされています。

上野焼の基礎を築いた尊楷。約四〇〇年前のことで当時の史料も乏しく、その多くが「謎」とされています。

しかし、上野焼四〇〇年祭を間近にひかえた今、少しずつ歴史の扉が開かれてきたのでした…。

## 特集 上野焼のルーツを探る／日韓交流事業

# 開祖金尊楷と故郷泗川



### 泗川市

釜山から車で高速道路を利用し約3時間。西部慶南海岸に位置する。交通要所であり豊かな観光資源がある。空港・漁港も有する。人口は約12万人。面積は約396km<sup>2</sup>。

## 少しずつ開かれた歴史の扉

上野焼の由来の多くには「文禄・慶長の役の際、釜山城主尊益の子尊楷が、加藤清正公に従って帰化し…」と、記されています。しかし、実際には釜山城主に尊益という人はなく、韓国に「尊」という名前はあまりみられません。

「はたして、尊楷の出生はどこなのか…」上野焼四〇〇年祭実行委員会では、式典の趣旨でもある「先人陶工の労を讃える」意味からも、この問題はぜひ解決したいと考えていました。

上野焼の開祖、陶祖といわれる尊楷については、当時の詳しい記録が残っておらず、謎のベールに包まれたままでした。現存する史料は、いずれも江戸時代後期または明治時代初期に記されたものばかり…。

しかし昨年、韓国の方から尊楷に関する情報が、その子孫にあたる上野焼窯元の十時さんと渡さんに寄せられたのでした。

そのいきさつは、韓国の作家・鄭棟柱さんと泗川文化新聞社社長・金南珍さんが、井戸茶碗（朝鮮産の国宝級の茶碗）の研究を進める中で、韓国「泗川」と「尊楷」の名前が浮上ってきたというものでした。

金尊楷が居住していたと伝えられる泗川市花田の里。山の中央部、窪んだ所が1900年頃まで十時と呼ばれていた場所。上野喜藏（尊楷）の息子は、その故郷十時郷にちなんで、十時姓を称したと伝えられている。

◀ 泗川市船津公園にある忠霊碑。文禄・慶長の役の際、この公園に建っていた船津里城は、堅城であったため激戦を極めたという。忠霊碑はその犠牲者の慰霊のため建てられた。



『萩焼は「李勺光」、薩摩焼は「沈寿官」、いずれの開祖名を考えても「尊楷」というだけの名に疑問を持つていた。今回の泗川からの報告で道が開けた。四百年の伝統の出発点が出来たような気がする』と、上野焼協同組合青柳理事長は語ります。今まで「尊楷」しか分かっていなかったのですが、正しくは「金尊楷」。朝鮮慶尚南道泗川郡十時郷の出身説が有力になってきたのです。



## 上野焼の由来を考察

金尊楷（上野喜蔵）について、上野家の先祖付などには「明王神宗の頃、朝鮮国釜山海の城主を尊益と云う、その子を尊階と云う、神宗万曆四十二年、加藤主計頭清正朝鮮より凱陣の時日本に移り来り、暫く肥前の国唐津に逗留す、その後尊階朝鮮に渡り、高麗の陶法を伝えて再び帰朝す、慶長七年、三斎忠興、豊前の国入封の節、俸禄を与え家人となし、同国上野郷にて陶器を製せしむ、則ち郷名を家名に免じ、尊階を革め上野喜蔵と称す」と記されています。

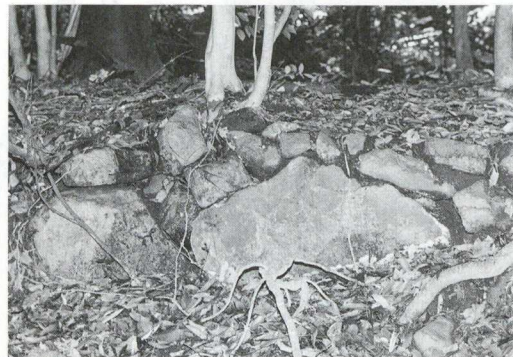
すなわち尊階は釜山海城主の子で、加藤清正に従って日本に居住し、その後、もう一度朝鮮に渡って製陶技術を身につけ、上野で作陶したというのですが、城主の子が短期間で陶技を身につけたというのは、理解しにくいといわれています。

また別の記録には、尊楷は「朝鮮泗川縣十時郷に住す……豊前小倉の城主、毛利壱岐守勝信に従いて帰化し」とまったく別のことが記されています。

今回、泗川市から寄せられた情報をもとに考えると、尊楷が泗川出身ならば、文禄・慶長の役で朝鮮半島の西、泗川方面に出兵していた毛利（壱岐守）勝信に従い日本に渡ったと思われる。加藤清正は主に朝鮮半島の東方向を進軍しました。

そうすると、上野焼の由来は「文禄・慶長の役の際、毛利壱岐守勝信に招致された朝鮮泗川縣十時郷出身の李朝陶工金尊楷を細川忠興が招き…」となりそうです。

赤池町史にもこれに近い記述がなされています。



釜の口窯跡付近には陶工が居住していたと思われる屋敷跡の石垣がある。

▶ 熊本県八代市平山の窯跡（熊本県指定史跡）上部にある上野喜蔵（金尊楷）の墓。墓石には「覚源院本誉宗清」と記されている。（資料提供：八代市教育委員会）



楷（喜蔵）に関する記録はいずれも江戸時代後期または明治時代初期の記録で、どれだけ正確か分からず、確固たる史料も見られません。唯一、当時（慶安二年・一六四九）の記録に、正保二年（一六四五）三斎が死去すると喜蔵は、その日に出家して扶持などを返上して宗清と号し、承応三年八月六日に、八九歳で亡くなったと記されています。その史料の少なから依然として謎の部分が多い上野焼開祖・金尊楷。ただ、ここで推測できることは、彼の壮絶な人生です。

生まれ育った泗川での作陶、し烈を極めた日本の侵攻、荒波を越えての渡日、途方に暮れた唐津滞留、忠興との出会い、上野での開窯、肥後への転居、忠興の死と出家……。激動の時代背景にもたらされた波瀾万丈の時を過ごしたのではないかと考えられます。そして、細川忠興の死後、即座に出家したことから、尊楷（喜蔵）がいかに忠興を慕っていたか、その強い主従関係を越えた絆のようなものがうかがえます。上野焼四〇〇年祭では、伝統を築き上げてきた尊楷をはじめとする先人陶工の労を大いに讃える式典を開催する予定です。上野喜蔵（金尊楷）の墓は、現在八代市平山の窯跡（熊本県指定史跡）の上部、ミカン畑の傍らにあります。激動の時代に生きた開祖は、そこで静かに眠っています…。

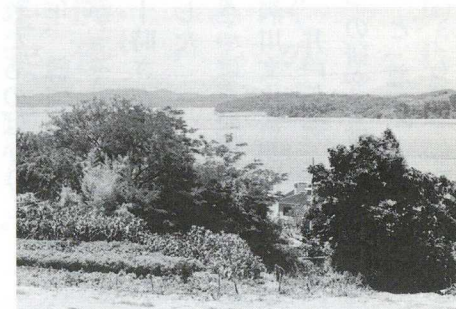


金尊楷（上野喜蔵）が上野の地で開窯した釜の口窯跡。上野焼の原点というべき史跡。伝統ある国焼としての基礎は、この時期に築かれた。約4.5Mにも及ぶ大きな連房式登り窯跡がある。

## 激動の時代を 駆け抜けた人生

金尊楷は、享年から逆算すると永禄九年（一五六六）の生まれということになります。泗川市からの報告によれば、尊楷は朝鮮慶尚南道泗川郡十時郷出身で、同県花田里の十時に居住し、その近く（現在の古窯跡）で作陶していたとされています。そして、慶長の役帰陣に伴い、尊楷は慶長三年に来日し、当初は唐津領内に滞在したといわれています。その後、関ヶ原の戦（一六〇〇）で大功のあった細川忠興が、丹後国（京都府）から豊前八郡、豊後二郡にわたる三十六万石の豊前国小倉藩主になった慶長七年（一六〇二）、金尊楷は、小倉入城と共に招かれました。そして、上野郷に地を与えられ、郷名

にちなんで上野喜蔵高国を名乗ったといえます。喜蔵（尊楷）は、細川氏から六人扶持を拝領し、荒仕子（生産を手伝う人）六人を与えられ、やきものは値段を決めて上納し、代価は米で支給されたといわれています。また、たびたび小倉に呼び出され、殿様の御前で陶器を製し、もと御船頭だった字介が絵付けを行い、しだいに繁盛して弟子百人がいたとも記されています。しかし、前頁で述べたとおり、尊



▶ 泗川市船津公園から眺める船津浜。金尊楷は、この浜から船出したといわれている。

▼ 花田の里にある窯跡からは、多くの陶片が出土している。

